美術科教育学会通信 №51

２００３年１２月１９日発行

事務 ／通信　〒184-8501　東京都小金井市貫井北町４－１－１
東京学芸大学　美術学科　美術科教育学研究室内　柴田和豊宛
Ｔｅｌ．/０４２（３２９）７６０８　Ｆａｘ．/０４２（３２９）７５９９（柴田直通）
Ｔｅｌ．/Ｆａｘ．０４２（３２９）７５９４（相田直通）
Ｅ－Ｍａｉｌ．/kshibata@u-gakugei.ac.jp（柴田）　/aidaman@u-gakugei.ac.jp（相田）

学会ご案内にかえて

開催大学代表　若元澄男
(広島大学大学院教育学研究科)

２００３年１０月のプレ学会は，「美術教育の今をみつめて」と「基礎・基本」をキーワードにシンポジュウムをもった。花篤 實先生にはコーディネーターを，奥原球喜先生（広島市立本川小学校長），半直哉先生（東広島市立西条小学校教諭），橋本泰幸先生（鳴門教育大学），福田隆眞先生（山口大学），福本謹一先生（兵庫教育大学），山田芳明先生（鳴門教育大学）にはシンポジストとして様々な切り込み口から多大なご示唆をいただいた。やや乱暴な要約をするなら美術教育における「基礎・基本」とは，単に技術的なことを身に付けさせるというような，断じてそんな表層的なものでなく，「生き方・あり方」を支えるものでなければならないこと。そうしたレベルの「基礎・基本」を身につけさせるためには，教育最前線の私達が，「子どもをみてとる」「生活をみてとる」「世界をみてとる」ことこそ肝要であり，この文脈を背景に「子ども達にとって必然性のある美術教育」をつくりあげていくことの大事さをあらためて確認しあうことができたように思う。

おかげで，小・中学校等の教員を含む，１４０名余りの参加者の多くから開催者冥利に尽きる反響をいただいた。本誌面を借りて，まさに手弁当でご登壇くださった７名の先生方にあらためて心からのお礼申し上げたい。また，プレ学会が大学教員のみで終始するのでなく，大勢の小・中学校等の現職教員の参加を得，「実践と理論の統合」という願いを持ちつつ準備を積み重ねた事務局の三根和浪及び中村和世もさぞ報われたことと思う。このことは本学会にもつないでいきたいと考えていることであり，あえて記して報告させていただく。

さて，来たる２００４年３月２０日及び２１日が本学会である。前にもふれたように，プレ学会から本学会までを通底して私達が目指しているのは，いまさらとの思いを持ちつつ，でも「実践と理論の統合」である。このことを底辺に据えながら「美術」が，そして「美術教育」が人にとってどのような意味を持ちうるのかを検討し，あらためて「美術教育のいま」をみつめ未来への確固たる展望を確認し合うことができたならこれ以上のことはないと考えている。

そのため，講演講師のお一人は，画家岩下哲士氏（同封の滋賀県立近代美術館「ニュース」コピー及び「チラシ」参照）を招聘している。私の最も敬愛する画家であり，これが最大の招聘理由である。また，この際，ご母堂にも登壇していただき

対談に加わっていただく予定である（ご尊父も同行してくださるはず）。この対談の中から，きっと「美術」及び「美術教育」の意味をとらえ直す切っ掛けをつかんでいただけると信じている。なお，流れが無理なく形成できれば岩下氏とフロアーの皆さんのやりとりも考えている。いま，お一人の講演講師は，解剖学者の藤田尚男先生（広島大学及び大阪大学名誉教授）である。藤田先生は，かつては広島大学医学部で，１９８０年以降は大阪大学医学部で教育及び研究を展開された先生である。美術をこよなく愛してこられた藤田先生には「美術と私」というテーマでお話をいただくことにしている。美術教育に携わる私達にきっと限りないご示唆をいただけるだろうことを信じている。さらに，学会日程には「シンポジュウム」も予定している。参加者各位には講演とはまた異なった視点から美術教育の来し方行く末について思いを馳せていただくことができるものと考えている。こうした二日間の日程の中で「美術」,「美術教育」及び「実践と理論の統合」をキーワードにしたあらたな「なにか」を見つけてくださるなら開催者冥利である。　（2003.12.12）

※事務局（三根）からの連絡事項を付記する。平成１５（2003）年 12 月５日付で，「研究発表申込者各位」にむけ「研究発表概要集の原稿形式及び執筆要項」は発送済みであり，万一お手元に届いていないようであれば，至急，ご連絡くださるようお願いする。

＊　＊　＊

学会在り方検討委員会報告

同委員長　金子一夫（茨城大学）

Ⅰ　問題点の整理

１．報告書作成経緯

平成 13 年以来、新井哲夫、長田謙一、永守基樹、福本謹一、そして金子が検討を重ねた。特に永守委員から問題点の体系的な整理、新井委員から実践的課題に応える学会体制の提案がなされた。平成 15 年夏の理事会での委員会報告を同会の議論をふまえて圧縮紹介する。同報告は委員の意見書及び前年度理事会での議論をもとに、委員長の金子が作成した。

２．本学会の果たしてきた役割

①学会発表を継続させ、美術教育学という研究領域の存在を明確にした。

②それら発表が美術教育に関する情報と言語を飛躍的に豊富にした。

③常に一定数の美術教育研究者の交流の場を設置して連帯感を強めた。

３．学会在り方委員会設置の背景

委員長の個人的見解として、この委員会設置の課題を以下のように整理した。

①学会発足時から役員として二十数年学会を維持してきた中核メンバーが 50 歳を超え、学会運営の思考に停滞と疲労がきている。しかも彼らの多くが近時の大学組織改革に労力を取られている。他方、学会の次代を担う 40 歳代以下の台頭が見えにくい。その世代を十分に育てられなかったと言える。この経年疲労打開と若手育成をいかにすべきか。

②美術教育学構築という、学会初期には自明であった目的の輪郭がはっきりしなくなった。学術研究の交流と発展という一般論を超えて、美術教育学研究の課題の再確認をすべきである。

③学会の制度的基礎である美術関係教科や教員養成制度が揺らいでいる。それらに学会としていかに対処すべきか。

④ここ数年間、学会活性化の様々な試みが成果を挙げた。この活性をいかにして持続するか。

Ⅱ　各問題点に対する打開方法案

１．経年疲労打開と若手育成

①他学会のような役員選挙での半数交代制、役員継続再選の廃止、役員定年制の導入等が考えられる。ただ、それらの導入による機能麻痺の危険性もある。

②若手が登場する機会を増して育成をする。若手に学会誌のレビュー論文を書かせたような試みを他の面でも考える。

２．学会の目的の明確化

美術教育学構築の課題は、依然としてある。美術教育学研究とは何かを学会誌委員会等で明確にすべきである。それ以前に本学会が考える研究論文の最低限の必須条件や実践研究論文についての共通理解を作るべきである。そうでないと、誤った研究イメージを会員に与える。

３．対外的重要事態への対処

現在進行形の教育政策や教科書は様々な利害に関わるとはいえ、それら重要事態に学会として発言すべきという声は多い。委員長の個人的見解としては、学会としての懸念や意見の表明は、あくまでも学会としての高度な理論的観点からの懸念や意見であるべきであるとしたい。

４．学会の持続的活性化

①役員は任期中に少なくとも一回、口頭または学会誌発表をするという仲瀬理事の提案を、申し合わせとして実現する。

②新入会員増を図るため、学会の存在を持続的に広報する。地区会や研究部会への参加だけで十分とはしない。

③大会や学会誌は面白い、または役に立たなければならない。そのためにまず前述の役員がそのような発表をする。ただし、あくまでも学問的追求の結果、面白い、役に立つ内容である。

④美術教育実践研究の口頭発表や論文について学会として積極的に講習をする。

＊　＊　＊

美術科教育学会　東地区会，西地区会 開催された地区会の報告

東地区会では第５回東地区会，西地区会では第４，５回の２つの地区会が開催されました．このうち第５回東地区会(宇都宮美術館)について報告いたします．第５回西地区会(奈良教育大学)については，次号で報告予定です．（第４回西地区大会（広島大学）については本通信巻頭記事をご覧下さい。）

第５回東地区会報告(in 宇都宮)

岡本康明(宇都宮美術館)

宇都宮美術館展覧会「ヨハネス・イッテン　造形芸術への道」に合わせて開催し

ました公開研究(2003年9月14日(日))には，一般の方を含めて70人余りの皆さんに参加頂きました．

内容は，戦後ドイツの芸術大学等のカリキュラムにイッテンが与えた影響や，日本の自由学園からイッテンシューレに留学し，帰国後，自由学園工芸研究所を設立して，イッテンの美術教育を実践した山室光子・笹川和子氏について研究．さらには，イッテンの今日的意義の視点から，自身の活動とイッテンの美術教育の可能性についての発表など多彩な内容となりました．

なお，この発表を含め，関連事業として行った講演会などをまとめた記録集を，来年3月末に発行します．参加頂いた皆さんにはお送りする予定ですが，希望される方がおられましたら，ご連絡下さい（送料自己負担）．また，カタログは完売しましたが，1月から東京国立近代美術館でも開催されますので，お問い合わせ下さい．

問い合わせ先
宇都宮美術館学芸課　岡本康明
320-0004　栃木県宇都宮市長岡町1077
TEL028-643-6845　FAX028-643-0895

平成15年度科学研究費補助金採択課題 本学会関連一覧

本年度の学会員による科研採択課題(研究代表者，テーマ，配分金額)をお知らせいたします．通信係に寄せられた情報並びに＜科学研究費研究会編『平成15年度科学研究費補助金採択課題・公募審査要覧』ぎょうせい，2003年10月＞を参考にして作成しました．一覧の掲載漏れの他，その他の財団や基金の援助を受けた研究，ユニークなプロジェクト・企画を行っている会員からの紹介もお持ちしております．Tel･Fax0742-27-9223(奈良教育大宇田研究室直通)，udah@nara-edu.ac.jp，

＜研究成果公開促進費　学術図書＞
○蝦名敦子：基礎造形教育におけるデッサンの目的と意義 - 絵画作品の幾何学的実証を通して -，120万円，多賀出版

＜基盤研究(B)＞
新規分○大橋功：美術教育における『鑑賞』学習のカリキュラム開発に関する研究，1030万円

継続分 ○西野範夫：子どもの学びの過程に対応する基礎・基本学習カリキュラムと教育実践の総合的研究，400万円

＜基盤研究(C)＞
新規分 ○石崎和宏：美術鑑賞におけるレパートリーの分析とそのスキル習得のための教材開発，140万円 ○ 藤澤英昭：小学校教員養成課程における「ものづくり・工作」教育の理論的枠組みと教材開発，120万円 ○石川誠：学校と地域の美術館の連携による生涯教育を見通した鑑賞実践プログラムの構築，150万円

継続分 ○鈴木幹雄：ドイツにおける文化創出システム《ドクメンタ》へのバウハウス教育学の貢献について，80万円 ○南部正人：へき地小規模学校のための造形支援プログラムの研究，60万円 ○磯部洋司：明治・大正期の美術教育思潮に関する研究，120万円 ○上山浩；表現活動としてのコンピュータ・グラフィクスの教育機能，10万円 ○新関伸也：教育学部美術科における「映像メディア表現」のための系統的カリキュラム構築，80万円 ○水上喜行：造形に於ける時間軸表現の演習モデル研究，90万円 ○橋本泰幸：地域社会との連携による「生きる力」を育む美術教育プログラム及びネットワークの開発，

30万円 ○宇田秀士：美術教育における教師の＜意識 - 規範・文化＞と題材・単元との関係，80万円

＜萌芽研究＞
新規分 ○長田謙一：「参加」型美術の今日的展開と生涯学習社会におけるその教育的意義・可能性，140万円 ○本村健太：映像メディアにおけるモーション表現の美的構造に関する実践研究，50万円

継続分 ○上野行一：公立文化施設における創造的な芸術教育プログラムに関する研究，90万円 ○立原慶一：題材論的方法と絵画療法における教育的作用の連関を求めて，110万円 ○岡田匡司：音楽と絵画を結びつける新教材の開発と基礎理論の整備，140万円

＜若手研究Ｂ＞
継続分 ○直江俊雄：リチャードソンの教育方法に基づいた表現の多様性と批評的探求に関する研究，80万円 ○内田裕子：キンジストロフィー症患者さんのための造形教材の開発，230万円 ○幸秀樹：鑑賞教育プログラム作成のための児童の視覚イメージ力に関する研究，40万円

＜奨励研究＞
○北澤晃：個々の子どもの学びの過程の成り立ちと評価の在り方，23万円 ○宇賀神俊彦：生涯学習につながる多様な美術館のあり方 - 中学生用美術館鑑賞カリキュラム開発 -，19万円 ○人見和弘：生徒の能動性を生かす中学校美術科の鑑賞指導のあり方を求めて，23万円 ○足立元：映像(静止画像)制作の課題を通した高校生の美的感性に関する研究，23万円 ○木村典之：ドラム缶窯による黒陶制作の可能性 - 中学校美術科教育への黒陶教材導入をめざして -，21万円

平成14年度の基盤研究等における第一次段階審査委員が，任期を終了した委員より公表されています．本学会関連では，新関伸也氏(滋賀大学)，長田謙一氏(千葉大学)が担当されました.(平成13，14年度担当) 今号も含め学会通信に掲載したこの6年間の動向(通信32，36，39，43，47号に掲載.)も次年度秋申請の参考にしていただければと思います．また，小・中・高などの教育現場の先生方が応募できる＜奨励研究＞は，年明け1月締切の予定です．詳しくは，以下の科学研究費補助金ホームページをご覧下さい．
http://www.jsps.go.jp/j-grantsinaid/index.html

＊　＊　＊

書評 『美術鑑賞宣言』を読んで

赤木里香子（岡山大学教育学部）

本書が日本図書館協会選定図書に選ばれたことは、美術教育関係者にとって嬉しいニュースである。全国各地の学校や公立図書館の書棚を彩り、多くの読者との出会いを待っている同書の第一印象は、スタミナ・ドリンクかビタミン・サプリメント。

鮮やかな黄色いカバーから、そんな連想が生まれる。そのパワフルなイメージは、執筆者それぞれが持っている強さとしなやかさに重なるだろう。冒頭で編者が述べているように、本書には「どの箇所にも単なる解説を超えた個人の視点が織り込まれ」ている。それゆえ、ふと拾い読みするうちに執筆者の顔が見えそうな生々しさを感じ、釘づけにされる。ドキュ

メントから現実が立ち上がる感覚は、編者が「ライブ感」と呼ぶものと同質かもしれない。

等身大の語り口があるから、「私がこの作品に出会ったのは」「私にとってこの作品は」「私はこの作家に会って」といった文章が頻繁に出てきても、嫌味もなく空々しくもなく受け止められる。単なる啓蒙書を超えるための実験は、まずは成功しているように思える。個人の視点が真の普遍性を持ちうるという立場は優れて現代的である。

それなのにというべきか、だからというべきか、少々歯がゆさのようなものも感じられる。鑑賞は「一人ひとりが感じ、考えるプロセス」であるという、本書のとらえ方に異論があるわけではない。しかし、社会のなかで美術なりアートなりが支えられてきたのは、「みんなが共通に感じたと信じ、認めるプロセス」があるからではないか。そんなものは幻想にすぎないと一蹴されることだろう。しかし美術だのアートだのを信じたい人はまだまだ多い（私もいちおうその一人である）。鑑賞の対象など実は何でもよさそうなものなのに、輪郭も定かでない「美術」なるものの鑑賞にこだわる人々がいるのはなぜか。あるいは「美術」の存在を信じさせ、おもしろいと思わせるのはどんなトリックか。その謎を解き明かしつつ読者をアートワールドに巻き込んでしまう新著を、この優れた執筆陣に期待したい。タイトルは『どんと来い！美術鑑賞』なんてどうだろう。

冗談はさておき、もうひとつ気になったのは、本書がサブタイトルとする「学校＋美術館」。美術館の教育的機能重視の方向性と、学校の鑑賞教育重視の向かうところは、ア・プリオリに同じわけではないだろう。学校の教師と美術館の学芸員とがすれ違いを演じることも極めてよくある。両者の「相互理解と協力」を求めるには、「学校≠美術館」を示す視点も必要と思われる。もちろん執筆者たちも、そこから生じる数々の困難との格闘を続けているはずだ。美術館が持つ力と学校が持つ力。そこに違いがあるからこそ、つながりが求められるという極めて単純な前提は、しかし、もっと強調されても良かったのではないか。

ともあれ本書は、取り上げられたトピックの多様さや新鮮さだけで評価されるべきものではない。一定のお試し期間を経て私が感じたのは、この本は劇的な特効薬ではなく、身体にやさしくじわりと効いてくる天然バランス食品ではないかということだ。これからも永く愛用してみたい。

『美術鑑賞宣言－学校＋美術館』
編著者－山木朝彦・仲野泰生・菅　章
（執筆者総数三九名）
発行日－３月25日，価格:3.000円（税別），
総頁数－376頁（色刷り32頁）
出版社－日本文教出版
ISBN4-536-40047-8

＊　＊　＊

■新入会員の紹介■

菅沼　稔（神奈川県立厚木西高等学校）
佐藤里奈（NPO法人ライナスの会湘南ライナス学園）
冨田　晃（弘前大学教育学部）
内田十詩哉（埼玉県久喜市立久喜中学校）
平間克司（茨城県ひたちなか市立長堀小学校）
岡本芳枝（広島市現代美術館）
渡部由紀（東京学芸大学大学院）
高桑康二郎（筑波大学人間総合科学研究科）
開　仁志（富山大学教育学部附属幼稚園）
春田友則（筑波大学大学院）
河内世紀一（筑波大学大学院）

■お詫びと訂正■

前号（美術科教育学会通信50号）p.12「新刊のお知らせ」の執筆者が赤木里香子氏となっていますが事務局の誤りです。赤木氏と会員の皆様に不備をお詫びし，ここに訂正させて頂きます。